1 ТОМ

Предисловие к 1 тому

Ａ．モナストゥイルスキー

『郊外への旅』第一巻　序文

　ここに記述されているアクションの大部分は、一群の人々がアクションの主催者によってなにか知らない行為に参加するよう招かれている状況である。このような状況で起こることはすべて、経験的な層において（主催者の事前の計画に従って）起こっているものと、心理的な層において起こっているもの、すなわち行為の間に参加者の視野において起こっていることの体験と、行為に先立つことと同伴することの体験に分けることができる。

われわれの仕事でわれわれが興味を抱いているのは心理的なもの、〈内的なもの〉の領域であるので、あらゆる種類の先立つ出来事、つまりアクションのデモンストレーションの〈野〉のいわば〈周縁〉で起こっていることに特別な注意が払われることになる。デモンストレーションの野それ自体が拡大して、検討の対象となっていくが、われわれはそこに、一定の特性と相互関係を有する地帯を見出そうとしている。こうした特質や関係は、われわれが想定するところでは、知覚のレベルの形成に作用するであろうし、そのひとつにおいて、起こっていることの体験が、解放されゆく意識の特に〈内側で〉起こっていることとして達せられ得るかもしれない――これがアクションの全体としての課題である。構造の点では、ほぼすべてのアクションのはじまりが展開されることになる直接的知覚の枠を、任意に超えることがないようにすることを課題としている。

その関係で、当然のこととして、アクションの筋に対する態度が変化する。神話的、あるいは象徴的な筋の内容は、それ（筋）が構成要素のひとつとして、道具として用いられて創造されるようなある知覚のレベルの設計においては、（主催者の企図としては）重要なものではない。

　一方、デモンストレーションの野におけるあらゆる行為は、いかに最小限のものであってもやはり解釈を引き起こし、デモンストレーションの野それ自体のひとつの隠喩的層の上に、さらにもうひとつの層が重なることになる。すると観客はあれやこれやの行為がなにを意味しているのか考え始め、最終的にはその神話的あるいは別のなんらかの内容を〈見出す〉。確かに、いくつかのアクションの構造は、解釈のプロセス（〈解釈性〉それ自体）を含んでいる、すなわちそれが実現している間、心理的必要性としての〈解釈する〉必要性は、ある方向にむけられた、そのうえ明らかに主催者にとっては嘘であるような認識として具現化する。このように、アクションの間、拡大された解釈は除外されていても、その後それは不可避であり、またアクションは通常短時間であるので、参加者には、この〈神話性〉は行為それ自体の間に自分たちが読み取ったものであるという印象が生まれ得る。自由な解釈の問題はわれわれにとって根源的に重要なものだ。われわれは自由な解釈を〈外部の観察者〉のデモンストレーション的立場として考えている。この立場にあり、またこの立場にのみあるのが、例えば、アクションを記述したテクストの読者である。一方、アクションそれ自体の間、そして特にそれが見かけ上終了した後の一定の時間、こうした立場の形成を妨げるいくつかの方法がある。そうした方法のひとつがデモンストレーション外の要素の導入で、体験のレベルを継続し、アクションの時間的終了が不明瞭であるという印象を与える作用がある。行為のさまざまな段階における、

デモンストレーション外の要素のデモンストレーションの構造への導入と、そのデモンストレーションの時間への流入を、以下、〈空虚な行為〉と呼ぶことにする。

観客に、彼らの意識が出来事の設計に（あるいは自覚行動への準備に）含められていたことが明らかになるために、また、出来事が起こっている間、彼らの意識も物理的には存在しない〈外部の観察者〉のためのデモンストレーションの対象となっていたという事実が、認識する回想に沿って、観客によって考察されるために、われわれはデモンストレーション的な関係のシステムを示しつつ、観客-参加者の意識を同時に美的行動の成分のひとつとしても形成する〈空虚な行為〉を導入する。

ここでわれわれは〈空虚な行為〉を原則として定義したが、一方で、それぞれのアクションにおいてそれは個別に現れ、観客が、起こっていることを、こうした言い方が許されるならば、〈努力して理解しない〉あるいは〈不正確に理解する〉ある時間的な区分として考察される。先走って、〈空虚な行為〉が実現されるための手段-行動あるいは手段-出来事が、直接的知覚のレベルでの瞑想のための条件をつくるのみならず、そのテーマともなることを指摘しておこう（出現、消失、遠ざかり、二重化など）。

われわれがデモンストレーションの構造の少なからず重要な要素とみなしているのは、相互関係の力学における客体性と主体性の関係である。記述されているアクションの中の人物と客体の運動が、主に観客から、あるいは観客へというふたつの直線に沿って起こっていることに読者が気づくのは難しいことではない。所与のコンテクストでは、この運動は、デモンストレーションのモデルの属性であるある種の〈知覚の線〉に沿った運動として認識される必要がある。

すなわち、アクションの行為のあらゆる人物や段階は、アクションの参加者と企画者がその遂行につれて〈通過する〉、空虚な（なにもない）デモンストレーションの〈野〉の端や地帯や関係を描く、いわば〈鉛筆の跡〉であるのだ。ここでわれわれはデモンストレーションの野それ自体にしばし立ち止まり、参加者の印象を考慮に入れ、またそこにある程度立脚しつつ、その段階や状態や構造の概観の記述に努めたい。

アクションに招かれた参加者-観客の第一段階の体験を、期待の状態と定義することができる。出来事の開始まで、経験の野においては、この期待の〈野〉はあらゆる種類の予感と予想で満たされる。招待状で約束された出来事が〈未知の〉ものであればあるほど、こうした予感と予想は具体的に形成されにくくなる。この体験の傾向として、このような具体性を最小限にとどめるならば、行為開始のそのときまで、期待の野は事実上空虚で緊張した状態にあり続けるということがある。ここでは、ある歴史・文脈的背景をなすさまざまなコンテクストが大きな役割を果たすのだが、それはアクションの計画の際に、一方ではアクションがその背景と結びついているために、他方ではその境界をいわば超えて、それによってこの共通の文脈的背景を変化させるために、考慮に入れておかねばならないものだ。（この意味で特に重要で決定的だと思われるのは、さまざまな精神的実践のいくつかの要素や、特に原則が、現代美学に浸透したことである）。

すなわち、もしも期待の野が〈空虚で〉あるならば、心理的体験としての期待それ自体も、凝縮され、ほぼ十分な（前-十分な）状態として感じられるだろう。行為は既に開始されたという印象が生まれるが、実際にはこの状態を体験する人はまだ、行為が見える（あるいは聞こえる）場所までやってきてはいない。

われわれは、前-期待と名付けることのできるこうした事前の印象を生み出すために、ふたつの手段を用いた。ひとつめは招待（あるいは事前の指示）という形式であり、もうひとつは出来事の場へと向かう旅の持つ空間-時間的特質である。デモンストレーションの野の以後の展開に

関して、そこでなんらかの期待される出来事を〈目にする〉ことが想定されている現実の（経験的）野とまだ視野を通して〈合流して〉いない心理的な野を、われわれは前-期待野と呼ぶことにしよう。

ここでわれわれは、デモンストレーションの野に、心理・視覚・経験の野の総体という予備的な定義を与えることができるが、そこには行為それ自体に先立つ体験と出来事も、また行為の完了後も継続するものも含まれることを指摘しておくのは重要である。

前-期待の曖昧にされた空間-時間的境界が、もはや期待であるようなより厳格な空間的・時間的な限定に凝縮されるのは、観客-参加者が「ここでそれが起こる」というようなもっとも単純な指示-予告によって、森から開けた空っぽの野に出る瞬間である。このような心理的な状況において、無条件かつ無意識に〈空（から）〉という形容を与えられてしまうこの現実の野には、より詳しく立ち止まっておく必要がある。現実の野は茶色だったり緑だったり、平坦だったりでこぼこだったりいろいろだが、前-期待を体験し終え、今は期待を体験している人にとって、このときの野の主な特質であるのは、〈空っぽ〉であることだ。

現実の野のこのような〈空虚〉の体験と、期待の空虚な〈野〉として継続している期待の体験は合流する。現実の野はメタファー化されて、どこかの段階で期待の野の継続であると受け止められ得るようになるが、その際、〈不可視性〉、非客観性、〈内面〉への志向性、つまり意識に対する非対置性といった、心理の野に特有の性質を与えられるのである。かなり大きさのある現実の野の自由な広がりこそが、視野が空間にいわば自由に展開され、それと共に期待の野も〈展開される〉とき、凝縮された期待の長時間にわたって維持する効果を与えるということを述べておかねばならない。

ここで、なんらかの客体あるいは出来事の視野への乱暴な侵入によって、この状態が乱されないようにせねばならないという問題が起こる。すでに述べたように、われわれは参加者-観客になにかを〈見せる〉ことを課題としていない。課題は、期待から受ける印象を、重要で有意義な出来事からの印象として保持することにある。もっとも、前-期待が期待という解決を要求し、それが実現する場合、期待の方もなんらかの新しい体験という解決を要求する、つまりそれは不可避的に行為の開始を要求するのであり、さもなければそれ自体の対象として実現できない。ここで重要なのは、デモンストレーションの野のいわば周縁への〈誘導〉の結果到達された、日常的な知覚の直接的な層からの意識の開放状態を保ちつつ、アクションそれ自体の予定されていた出来事を通して、それが前-期待に先立つ最初の状態に戻らないように、そして十分現実的な出来事の知覚の際に、こうした解放状態の中でそれ自体のうちに保たれるようなやり方で作用することだ。

この課題の解決のために（ここでは出現、喜劇、第三案、絵画、行為の場という一群のアクションを念頭に置くことにしよう）、われわれは知覚対象（参加者-主催者の姿）をデモンストレーションの野の経験的層において、不可視の状態から、識別不可能地帯を通って、識別可能地帯へと段階的に引き出すという手法を用いる。

それでもやはり、これまでわれわれが純粋な期待の体験を有していたならば、現実の野に知覚の対象が現れた今となっては、この体験は打ち切られ、中断されて、強化された注視のプロセスが開始され、そのうえ、この対象がなにを意味しているのか理解したいという欲求が起こる。われわれの観点からすると、この新しい知覚の段階は間（ま）であり、知覚のプロセスの不可欠な段階であるのだが、すべてがそのために企てられたところの出来事では決してない。アクションの行為そのものが〈目をそらさせるために〉遂行されるということをまず言っておこう。期待の本質が、この段階の遂行を要求するため、設定された課題の枠内でこれを避けるのは不可能であるが、知覚を〈裏切る〉ことはできる、つまりそれを遂行しておきながら、あと

になって〈皆が一方向を見ていたとき、主な出来事はまったく違うところで起こっていた〉、この場合は観客自身の意識の中で起こっていたのだということをわからせるのだ。

ここには明らかにしておかねばならないひとつの重要な特色がある。それは、出来事は起こった、すなわち、この〈注視〉が〈そっちでない方向の注視〉だったと理解するときまでに、主な出来事はすでに起こっており、それに関しては今となっては思い出すことができるだけだということ、意識的にそれを追うのは無理で、なぜならそれが経過していくときには意識は他のことで占められており、別のものの知覚へと向けられているからだということだ。

だが、実際にはなにが起こっていたのか？ もしも現実の野において起こったことが嘘であるならば、どういう真実に対してそれが嘘だと理解されるのか？ この嘘はなにを指し示しているのか？ 明らかに、デモンストレーションのこの段階において、われわれは期待のかなり大きな〈野〉に〈囲まれて〉おり、あたかも端からかなりの距離まで足を踏み入れて、今では自分自身の中に閉じこもったかのようであるが、それはわれわれにデモンストレーションされたものが、実際にはわれわれの知覚のデモンストレーションであったからであり、それ以上のなにものでもなかったのだ。まさにこの純粋な期待こそが実際に起こったことであり、そのうえこれは成就された期待でもある。成就された、起こったのはわれわれが期待していたことでも、われわれに対置された具体的な出来事でもなく、まさに期待そのものが成就され、起こったのだ。言葉を変えれば、客体の知覚の間（ま）が同じこの期待として終わったのであるが、その期待はもはや知覚の別のレベルで起こっているのであり、それが経過している間はそういうものとしては知覚されない。期待はそれに関する回想を通して、行為のある瞬間に体験されていた。この瞬間の後には、出来事の終了（人の姿が野から去ること）はまったく直接的に、あたかもその制約性の外で、木々や草、観客自身と同じように知覚される、すなわちそれは脱隠喩化されているのだ。

現実の〈行為の野〉が、参加者-主催者がまだそこを去らないうちにふたたび〈空っぽの〉野になることを理解するのは重要である。参加者-主催者の一定の行為の結果、この野はふたたび〈空虚な〉ものとして隠喩化され、そこにはある種の〈高められた空虚〉の場とレベルが生起し、それとともに参加者-観客の知覚する（理解する）意識が隠喩的関係に入るのであるが、一方参加者-主催者は行為のこの瞬間の後、経験の野にいわば〈飛び降りる〉、すなわち、いまだデモンストレーションの野の経験的地帯にいながら、アクションの計画に従ってデモンストレーションされている対象として知覚されるのを止める。彼は単に森へと去って行く人物であり、それははじめに彼が単に遠くの森から現れてきた人物であったのと同様だ。

われわれがこの序文において、状況全体のうちのひとつの表面的な部分、すなわち〈観客のための〉、多かれ少なかれ美学の問題と関係している部分のみを検討していることをあらかじめ断っておく必要があるだろう。アクションの主な目的、つまり本質的に記号的ではないある精神的な経験を得ることと関係する、野で行為する主催者にとってのみ現実的意義を持つ内なる意味は、ここでは検討されない。

さて、このようなタイプの状況を創り出すためには、行為に用いられる客体や運動の形状（すでに述べたように、これは通常、出現した知覚の客体から主体へ、あるいは逆方向の直線である、すなわち、いわば主体-客体関係の〈線〉に沿っている）はすべて、自立した意義を持ってはならない。参加者という形象にはただ〈観客〉に対する〈参加者〉というだけの意義があるという以上のことは、そこにはいわば〈なにも書かれていてはならない〉のであり、もしなんらかの物が用いられる場合は、たとえば不可視性、あるいは同一性の印象を生み出すといった、知覚のある条件の創出のためのみに用いられねばならない。

すでに述べたように、知覚の客体の出現はわれわれのアクションにおいて不可視性から識別不可能性を通って生じるため、知覚する者の視覚の一定の順応を要求する。この手法はデモンストレーションの野の心理的地帯と経験的地帯を一致させる可能性を与える。

こうして、人物の姿の出現に続いて、ある〈嘘の〉出来事が〈識別〉地帯で展開され、そしてついに、起こっていることの1)　行為が虚偽の〈空虚な〉ものであったと観客が理解した瞬間の後に、直接的なものの領域に加えられた経験的出来事、2)　成就しようとしている期待の体験である心理的出来事、への明確な区分が生じる。

この区分の瞬間、意識は自らの期待の具体性から分離するかのようだ、すなわち回想を通して成就する期待は、自らの具体性において取られた期待なのである。したがって、この状況では記憶もやはりデモンストレーションの野の心理的地帯である。このモメントは次のように描写することができる。行為の真性は、知覚対象が非識別地帯から直接でない、対置された知覚の地帯へと出た瞬間に終わった。識別地帯における参加者-主催者のトリックは行為の真正性を過去に残し、現在には持ち越さないために行われた。〈それはさっき終わった〉のであり、〈それは今終わった〉のではない。だがわれわれはそのことを今知ったばかりである。〈さっき〉と〈今〉の間にわれわれは欺かれたが、〈今〉の瞬間にそのことを聞いた。この〈さっき〉と〈今〉の時間の間隔は、われわれの期待とわれわれの間の距離（われわれの記憶における）である。われわれは〈欺瞞のない〉状態にいて、ここからそれを〈見ている〉のであり、ある具体的な、時間的に伸びている表現-装置において自己欺瞞から解放されている。期待を〈見る〉ことは、実際には成就したそれ自体からの解放の期待としての期待を体験することである。おそらく、デモンストレーションの条件においてのこうした期待の特殊性こそが（もっともそれはここに述べられているような形では意識されないかもしれず、むしろそう意識されるべきではないのだが）、約束されたことが成就した、〈裏切られなかった〉という感覚を生むのであろう。

深く美的な意味においては、ここに提示されたアクションを、一般的な出現、消失、遠ざかり、光、音などの知覚を特殊にする試みと特徴づけることができるかもしれない。

1980年6月

翻訳　上田洋子

Translated by Yoko Ueda

Появление

＜集団行為＞（コレクチーヴヌィエ・ジェイストヴィヤ）
——アクションの記述・写真・映像・音源

第一巻（序文）

1. 出現

観客たちにアクション「出現」への招待状が送付された。招待された人々（30人）が集まって野原のはじっこに場を占めると、5分後、反対側の森から二人のアクションの参加者が現れ、野を横切り、観客たちに近寄って＜出現＞に立ち会ったことを証明する書類（＜確認書＞）を手渡した。

モスクワ　　イズマイロフスコエ草原

1976年3月13日

A. モナストゥイルスキー、L. ルビンシュテイン、N. アレクセーエフ、G. キゼヴァリテル

観客として参加した人　ー　A. アブラモフ、M. サポノフ、I. ゴロヴィンスカヤ、V. チナエフ、N. パニトコフ、N. ネドバイロ、R. ゲルロヴィナ、V. ゲルロヴィン、N. レーピン　＋　20名

露文和訳　生熊源一・上田洋子

Translated by Genichi Ikuma／Yoko Ueda

Ａ．モナストゥイルスキー　『郊外の旅』第一巻 序文

マルガリータ　トウピツィン。　モスクワの コンセプチュアル　アート

モスクワ・コンセプチュアリズム

Либлих

2. リーブリッヒ

発送された招待状には、「リーブリッヒ」を訪れるよう指示があった。観客たち（25名）が到着するまでに、イズマイロフスコエ草原の真ん中の雪の下に、スイッチを入れた状態の電鈴が埋められた。観客と参加者たちが野原から去った後も、その電鈴は鳴り続けた。

モスクワ、イズマイロフスコエ草原

1976年4月2日

A. モナストゥイルスキー、N. アレクセーエフ、G. キゼヴァリテル

Sht.アンドレ、O.エチンゴフ、N.パニトコフ、V.グリプコフ、R.ゲルロヴィナ、V.ゲルロヴィン、O.ヤコヴレフ、L.メルクショワ（ヴェシネフスカヤ）の父、L.メルクショワ、V.ヴェシネフスキイ、V.スケルシス、A.アニケーエフ、I.ピヴォヴァロワ、V.ミトゥーリチ=フレーブニコワ、V.コンスタンチノワ+5名

翻訳　生熊源一・上田洋子

Translated by Genichi Ikuma／Yoko Ueda

Палатка

3. テント

N. アレクセーエフによって描かれた12枚の様式的な絵（1m×1m）が、1つの布地に縫い合わせられ、モスクワ郊外の森にテントとして配備され、放置された。

モスクワ州、サヴョーロフスカヤ鉄道、＜デポ＞駅

1976年10月2日

N. アレクセーエフ、M. K. 、A. モナストゥイルスキー、G. キゼヴァリテル、N. パニトコフ

V.ミトゥーリチ=フレーブニコワ、Sht.アンドレ

翻訳　生熊源一・上田洋子

Translated by Genichi Ikuma／Yoko Ueda

Лозунг – 1977

4. スローガン　１９７７

村と村を隔てる丘の上に、白い文字で「何も文句はないし、すべていいと思う。ここに来たことは一度もなく、この場所について何も知らないのだが（A. モナストゥイルスキーの本『何も起こっていない』からの引用）」と書かれた赤い布（10m × 1m）が吊された。

モスクワ州　レニングラツカヤ鉄道　＜フィルサノフカ＞駅

１９７７年１月２６日

A. モナストゥイルスキー、V. ミトゥーリチ＝フレーブニコワ、N. アレクセーエフ、G. キゼヴァリテル、N. パニトコフ、M. K. 、A. アブラモフ

露文和訳　生熊源一・上田洋子

Translated by Genichi Ikuma／Yoko Ueda

Шар

5. 玉

色更紗で玉のカバー（直径4メートル）が縫いあげられた。その後、森で、6時間のあいだ、雨の中を、われわれは風船を膨らまし、それらを更紗のカバーに詰め込んだ。その作業の後、＜玉＞の中にスイッチを入れた状態の電鈴をセットし、出来上がった干し草を積み上げたような形のものをクリャジマ川に流した。

モスクワ州　ゴーリコフスカヤ鉄道　＜ナザリエヴォ＞駅

1977年6月15日

A. モナストゥイルスキー、N. アレクセーエフ、G. キゼヴァリテル、L. ヴェシネフスカヤ、A. アブラモフ、M. K.

マジス・コリク、I. ビニヤミニ+1名

露文和訳　生熊源一・上田洋子

Translated by Genichi Ikuma／Yoko Ueda

Комедия

6. 喜劇

招待に応じてやってきた観客たち（10人）を、アクション参加者の一人が「ロブニャ」駅で出迎えた（電車所要時間40分）。観客たちが路線バスで＜キエヴィ・ゴルキ＞村までたどり着き（所要時間20分）、森を抜け（10分）、野原のはじに出ると、反対側からアクションの別の二人の参加者が現れた。彼らのうちの一人はもう一人よりかなり背が高く、ゆるやかで長い薄黄土色のスモッグを着ており、スモッグの裾を持って後ろを歩くもう一人の参加者は普通の服を着ていた。観客まであと80メートルのところで、スモッグを着た参加者は観客の方を向いて立ち止まった。普通の服を着たもう一人がスモッグの下にもぐり、その格好で二人は観客の方へ動いていった。観客から25メートルのところでスモッグの参加者が服を持ちあげると、普通の服を着た参加者はスモッグの下にはいなかった。その後、スモッグを着た参加者は右に曲がり、森へと去った。

モスクワ州　サヴョーロフスカヤ鉄道　＜キエヴィ・ゴルキ＞村近くの野原

1977年10月2日

A. モナストゥイルスキー、V. ミトゥーリチ＝フレーヴニコワ、N. パニトコフ、N. アレクセーエフ

I. カバコフ、V.モチャロワ、E. ゴロホフスキイ、S. シャブラヴィン+ 8名

露文和訳　生熊源一・上田洋子

Translated by Genichi Ikuma／Yoko Ueda

Фонарь

7. 電灯

夕暮れ時、ザゴールスク近郊の山で、ロープを使って木々の間に電灯が吊るされた。ガラスには紫雲母が貼りつけられていた。電灯の下には赤い風船が結び付けられ、帆の役割を果たした。この構造物は風を受けて回転し、揺れ動いた。様々な明度の紫色の閃光と、間によってさまざまな長さに分かたれた闇は、約2キロ先からも見えた。視界には、電灯の光以外にはいかなる光源もなかった。

（11月15日の前と後の数日は快晴だった。11月15日は予期せぬ曇りの日となり、湿った雪が降った）

モスクワ州、ヤロスラフスカヤ鉄道、＜カリストヴォ＞駅

1977年11月15日

A. モナストゥイルスキー、N. アレクセーエフ、I. ヤヴォルスキイ、I. ピヴォヴァロワ

翻訳　生熊源一・上田洋子

Translated by Genichi Ikuma／Yoko Ueda

Лозунг- 1978

8. スローガン 1978

「ここに来たことは一度もなく、この場所について何も知らないと、何故私は自分に嘘をついたのだろう —実際、ここは他のあらゆる場所と同じではないか、ただそれをより鋭く感じ、より深くわからなくなるだけだ」と白い文字で書かれた暗い青色の布（12m×1m）が川岸に掛けられた。

モスクワ州、ベロルスカヤ鉄道、ズヴェニゴロド付近

1978年4月9日

A. モナストゥイルスキー、N. アレクセーエフ、I. ヤヴォルスキイ、V. ヴェシネフスキイ、L. ヴェシネフスカヤ、G. キゼヴァリテル

翻訳　生熊源一・上田洋子

Translated by Genichi Ikuma／Yoko Ueda

Третий вариант

9. 第三案

招待を受けてやってきた観客たち（約20名）は、野原のはじに場を占めた。右側の森の、観客たちから50メートル離れたところから、紫色のスモックを着たアクションの参加者が現れ、（観客たちの列と平行に）野原をいくらか歩き、穴に入って、見えなくなるように横になった。3分後、彼が消えた場所から30メートルの距離に掘られた別の穴から、同じ紫のスモックを着て、だが頭の代わりに赤い風船をつけているこの参加者の姿が現れた。棒で風船を突き刺すと、そこに白い粉塵の雲が現れ、今はもう頭の無い参加者は、たった今そこから現れたばかりの穴に再び横たわった。彼が消えたと同時に、同じ彼が最初の穴（右に30メートル）から現れたが、すでに普通の服を着ていた。そして、今出て来た穴を土で埋め、アクションの始めに登場したのと同じ方向に向かって、森へと去った。

モスクワ州、サヴォーロフスカヤ鉄道、＜キエヴィ・ゴルキ＞村近くの野原

1978年5月28日

A. モナストゥイルスキー、V. ミトゥーリチ=フレーブニコワ、N. パニトコフ、N. アレクセーエフ、M. K.

I. カバコフ、V.モチャロワ、L. タロチキン、S. ボルダチョフ、V. ヴェシネフスキイ、

A.ウルソフ、A. ロフリス + 10名

翻訳　生熊源一・上田洋子

Translated by Genichi Ikuma／Yoko Ueda

Время действия

10. 行為の時間

野原の端に近い森の中、木々の間に糸巻きが吊られた。糸巻きにはアクションのオーガナイザーたちが事前に7キロメートル分の白いロープを巻き付けてあった。ロープの先端は野原の反対側、開けた空間の耕された地面を200メートル進んだところまで延ばされており、そこには観客たち（20名）とアクションの参加者2人がいたが（3人目の参加者は行為の間、森の中で紐のそばに立っていた）、糸巻きはそこからは見えないように吊ってあった。

13時30分から15時00分まで（一時間半）、アクションの参加者と観客の数人が交代でロープを引き続け、ロープは糸巻きからほどかれていった。ロープの端は糸巻きに固定されておらず、ゆえに行為の過程でロープはすべて森から引き出された。

モスクワ州、サヴョーロフスカヤ鉄道、＜キエヴィ・ゴルキ＞村近くの野原

1978年10月15日

A. モナストゥイルスキー、N. アレクセーエフ、N. パニトコフ、A. アブラモフ

L.ソコフ、L.バジャノフ、F.インファンテ、I. ザトゥロフスカヤ、L.タロチキン、I.チュイコフ、I.ピヴォヴァロワ、P.ペッペルシテイン、V.モチャロワ　+5-6名

翻訳　生熊源一・上田洋子

Translated by Genichi Ikuma／Yoko Ueda

Картины

11. 絵

カラーあるいは白の紙を貼り合わせて作った封筒144枚を入れ子状に組んで、それぞれに12枚の封筒が入ったセットが12組作られた（もっとも大きい封筒は40cm×42cm、もっとも小さいものは13cm×8cm）。すべての封筒には、出来事の形成面での役割を担うモメントが、次の12のパラダイムに従って上書きされていた。① 観客のための指示 ② すべてのアクションの行為の時間 ③ 行為の場所 ④ 天気　⑤ 封筒の色　⑥ 音　⑦ 知覚の対象　⑧ 身振り（行為）の終了時間　⑨ 観客の反応　⑩ 身振り（行為）の意味　⑪ 解釈、指示 ⑫ 事実の記録。これらは野原で、招待された観客たちに配布された（30名、そのうち12名がセットを受け取った）。観客たちが封筒を開け、雪の上にそれらを直線状に並べている間に（約50m）、3人の参加者が観客たちから離れ、野原を横切って森へと姿を消した。封筒の上書きをすべて読み終えた観客は、カラーの絵＝＜額＞が12枚できるように、一番大きい封筒をベースにして、その上にひとつ小さいものを貼り合わせていくという具合に、それぞれの封筒のセットを重ねて貼り合わせていった。上書きの部分は、事実記録のテクスト（すなわち行為の場所の指示、行為の時間、参加者リスト）を除き、すべて封筒の下に隠れた状態になった。その後これらの絵は、アクションの事実記録文書として観客たちに配られた。

モスクワ州、パヴェレツカヤ鉄道、＜ラストルグエヴォ＞駅、＜スハノヴォ＞公園

1979年2月11日

A. モナストゥイルスキー、N. アレクセーエフ、N. パニトコフ、I. ヤヴォルスキイ

I. カバコフ、M. ミトゥーリチ=フレーブニコフ、R. アルチュニャン、R. ゲルロヴィナ、V. ソフランスキイ、V.　ネクラーソフ、E. ゴロホフスキイ、I. ピヴォヴァーロワ、V. ドブロセリスキイ、V. モチャロワ、I. バクシテイン、B. グロイス、N. ニキチナ、K. ソコフ、I. チュイコフ、I. ゴロヴィンスカヤ　+　12-15名

翻訳　生熊源一・上田洋子

Translated by Genichi Ikuma／Yoko Ueda

Место действия

12. 行為の場

1. 撮影

招待を受けてやってきた観客たち（30名）は野原の端へと誘導され、野原を横切って反対側の森の壁の方へと順に直進していく過程で（道程350メートル）、スライドフィルム用の写真に撮影されるよう指示された。地面におかれた厚紙の小さな円によって、ルートを示す線が事前に引いてあって、それぞれの円には撮影ポジションの番号が書かれていた（全部で15箇所。撮影の起点からもっとも近い1番からもっとも遠い15番まで）。これらのポジションによって、ルートの線はそれぞれ約23メートルの均等な線分に分けられていた。それぞれのポジションに近づいた観客たちは、起点（彼らを撮影したカメラ）を振り返り、5秒間立ち止まってから、先へ進まなければならなかった（詳細なプランについては、資料No.2を参照）。次の観客の撮影は、前の観客が野原の反対側の森の中に隠れてしまったときに始められた。このようにして15人の観客たちの撮影が行われた後、追加の撮影が行われた（一部は同日、一部は1979年10月13日）。
1979年10月7日

2. 幕

撮影開始前に、ポジション13と14の間に（すなわち撮影の起点から300メートルの距離に）、われわれの手で紫色の布の幕（3m×2m）が張られた。最初の状態では（すなわち一人目の観客が接近する時には）、その幕は左側に寄せて（開けて）あった。観客は、幕のところまで来たらそれを広げて、その広げた幕が撮影の起点にいる一群の人々から観客を隠すように、すなわち観客が幕の向こう側にいる状態にするようにと、事前に指示されていた。幕の裏側には、穴の中に横たわっている前の観客と入れ替わるようにという文がとめ付けられていた（撮影ポジション14のところにわれわれの手で事前に穴が掘られていて、最初の観客が穴に来るまで、その中にはカメラを持ったアクションの参加者の一人が横たわっていた）。こうして、起点にいる一群の観客から幕で隠された観客は、穴に横たわっている者と入れ替わり、彼と入れ替わった者は幕の方へ戻って、再び幕を左に寄せた（この行為についても幕につけられた文で告知されていた）。その後、さっきまで穴に横たわっていた観客が、穴の中で自分と入れ替わった観客を写真に撮り、カメラを相手に託して、残りの二つのポジション（14と15）では自分が撮影を受けた。

このようにして撮影ラインの全ポジションで写真におさまり、アクション＜幕＞を遂行した観客たちは、つぎつぎに森へと移動していった。森には、観客撮影の見取り図、参加者の追加撮影の見取り図、スライドフィルムの順序、今回行われた撮影の素材から構成することになっていた白黒の展示の内容を図式的に示したボード（130cm×90cm）が、一本の木に取り付けられていた（ボードのテクストは資料No. 2を参照）。ボードの脇にはテープレコーダーを持った一人の参加者がいて、アクションに参加した観客たちの発言を録音していた。

モスクワ州、サヴォーロフスカヤ鉄道、＜キエヴィ・ゴルキ＞村近くの野原

1979年10月7日

3. スライドフィルム

撮影された素材から、スライドフィルム（資料No. 3を参照）と白黒の展示（資料No, 2、項目7を参照）が構成された。スライドフィルム上映後、フィルムへのコメントをテープレコーダー録音で聞いた（資料No. 4を参照）。その後、10月7日にボード付近で行われたテープレコーダー録音を流しながら、補足記録資料がスライドで示された。

モスクワ

1979年10月31日

A. モナストゥイルスキー、I. マカレーヴィチ、N. アレクセーエフ、N. パニトコフ、E. エラーギナ

I. カバコフ、I. バクシテイン、V. ミロネンコ、D. プリゴフ、O. ワシリエフ、E. ブラートフ、V. ネクラーソフ、V. モチャロワ、I. ピヴォヴァロワ、I. ヤヴォルスキイ、I. チュイコフ、S. グンドラフ、A. アニケーエフ、L. ルビンシテイン、S. ロマシコ、M. エラーギナ、L. バジャノフ、A. フィリッポフ、K. ズヴェズドチョートフ、V.　マカレーヴィチ、P. ペッペルシテイン、N. シバノワ+7-10名

翻訳　生熊源一・上田洋子

Translated by Genichi Ikuma／Yoko Ueda

Паниткову (Три темноты)

13. N. パニトコフに（3つの暗闇）

記述に対するコメント（アクションのプラン）

1.　アクションがどういうものなのか知らないまま、パニトコフとV. D.が昼間、森の中の雪原へとやってくる。雪にあまり大きくない穴が掘られて、その中に椅子が置かれる。パニトコフが椅子に座ると、他の参加者たちは座っているパニトコフを上からボードで覆い（雪の上、穴の四方に垂直に固定した柱を使う）、ボードの上に雪をかけ始め、雪の丘を作って、その中の暗闇にパニトコフが座っているようにする。

参加者たちは事前にパニトコフと、二度目に静寂が訪れたらすぐに椅子から立ち上がり、頭上のボードを持ち上げるよう取り決める。行為中ずっと、パニトコフの丘のすぐ側や周辺で、異なる周波数に合わせた6台のラジオが最大の音量で鳴っている。

2.　パニトコフの丘が建ったら、それに密接して同じ要領で第二の丘が建てられ、その中にはV. D.が座っている（第二の丘の作製に伴う作業の騒音は、ラジオによって妨げられているので、パニトコフはこの第二の丘のことを知らない）。

参加者たちはV. D.と、一回目に静寂が訪れたらすぐに椅子から立ち上がり、頭上のボードを持ち上げるよう事前に取り決める。

3.　V. D.の丘が建ったら、パニトコフの丘には少なくとも4×4mの黒い遮光性の布がかぶせられる。

4. 木に結び付けた複数のロープと遮光性の紙または布を用いて、雪に覆われた二つの丘の上に、長さ5m、幅4m、高さ2.5mの箱が作られる。

5.　遮光性の箱ができたら、フラッシュ付きカメラを持った参加者が中に入る。

すべてのラジオのスイッチが切られる。

V. D.が自分の丘の中で立ち上がり、頭上のボードを持ちあげる。

このときカメラを持った参加者が写真を数枚撮影する。それから二人は箱から出るのだが、その前にV. D.の丘の後に残った雪山をきれいに片づける。

再びラジオのスイッチが入れられる。

6.　二人の参加者が箱から出た3-4分後、ラジオが二度目に切られる。

7.　この間ずっと丘の中の暗闇に座っていたパニトコフは（丘の暗闇その1）、椅子から立ち上がって頭上のボードを持ちあげる。

8.　こうして丘を壊しても、丘の上には遮光性の布がかかっているため、彼はやはり暗闇の中にいる（布の暗闇その2）。

9.　布を剥ぎ取っても、パニトコフはやはり暗闇の中にいる（箱の暗闇その3）。

10.　その後の行為は、パニトコフが自分で決定して行う。

記述

アクションのプランを計画された形で実行することはできなかった。建てられたのはパニトコフの丘だけで、おまけに、布が小さく、パニトコフがボードと一緒に剥いでしまったため、布の暗闇は形成されなかった。箱の暗闇は、丘の暗闇よりいくらか明るくなってしまった（紙にごく小さな穴が複数あったため）。

モスクワ州、リシスカヤ鉄道、＜スニギリ＞駅

1980年2月17日

A. モナストゥイルスキー、N. アレクセーエフ、E. エラーギナ、S. ロマシコ、I. マカレーヴィチ、I.　ヤヴォルスキイ

翻訳　生熊源一・上田洋子

Translated by Genichi Ikuma／Yoko Ueda

Монастырскому

14. A. モナストゥイルスキーに

アクションの7人の参加者が、観客（A. モナストゥイルスキー）に向かって、片側が森で区切られたまだ足跡のない雪原で、互いに15歩の間隔をとって一列に並んだ。A. モナストゥイルスキーは4番目の参加者の向かい、彼から20歩の距離にいた。

アクション開始の直前、モナストゥイルスキーにテープレコーダーが手渡され、参加者の一人が合図をしたらテープレコーダーの再生ボタンを押すという指示が口頭でなされた。参加者たちとモナストゥイルスキーの行為に関するその先の指示はテープに吹き込まれていた。

合図（資料参照）は若干の間隔をおいて各々の参加者に順に与えられ、それによって何人かの参加者の運動が同時に起こることになった。すなわちモナストゥイルスキーの側から見ると、一定の、しかし彼には読みとり得ないプランに従って、参加者の全体が絶え間なく運動しているという光景が出現した。

アクション開始から10分後に、モナストゥイルスキーへの最初の合図があり、「観察地帯」から参加者たちの最初の配置の線上にある所定の位置への移動が指示された。こうして与えられた参加者たちの運動開始とモナストゥイルスキーの運動開始の時間的間隔（10分）はアクション中維持されて、行為の終わりが近づき、参加者全員が各自のルートを通って森に姿を消してしまったのに、モナストゥイルスキーの方はテープに録音された指示に従ってさらに10分間一人で野原を動いていたときに露見した（従って、合図はもはやモナストゥイルスキー一人だけに向けられており、合図間の間隔は増した）。

雪の深さが50-60センチに達していたため、野原を移動して回るには大変な身体的労力を要した。

参加者たちの足跡は「移動の全体図」を雪の上にかなり正確に再現するはずだったが、必然的に下図が変更された。

アクションの所要時間は30分であった。

パヴェレツカヤ鉄道、ラストルグエヴォ駅

1980年3月16日

N. パニトコフ、N. アレクセーエフ、E. エラーギナ、I. マカレーヴィチ、V. D.、S. ロマシコ、I. ヤヴォルスキイ

翻訳　生熊源一・上田洋子

Translated by Genichi Ikuma／Yoko Ueda

Лозунг – 1980 (Кизевальтеру)

15. G. キゼヴァリテルに（スローガン 1980)

春、野原のはじに、木と木の間にキゼヴァリテルによって白い布（950cm×80cm）が掛けられ、そこには赤い文字の文があった。

「ヤクーツク自治共和国、ミールヌイ市近郊」

1980年4月13日

A. モナストゥイルスキー、N. アレクセーエフ、E. エラーギナ、N. パニトコフ、V. D.、S. ロマシコ、I. ヤヴォルスキイ、I. マカレーヴィチ

翻訳　生熊源一・上田洋子

Translated by Genichi Ikuma／Yoko Ueda